

「構造分析」理論の紹介(1):
投映法検査「ハンドテスト」の解釈から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000406

「構造分析」理論の紹介 (1)

—投映法検査「ハンドテスト」の解釈から—

佐々木 裕 子

I. 序

Wagner (1971) によって提唱された「構造分析 Structural Analysis」理論は、人格構造として外面自己 Facade self (FS) と内面自己 Introspective Self (IS) の二大構造を仮定した人格論である。構造分析では、人格をこの二大構造から理解することで、表に現れたその人の外顕的特性と、直接観察することのできないその人の内的な特徴とを分けて理解することを可能にし、その人の内的体験と実際の行動との差、およびその葛藤や相補的な機能など、人格の二面性を理論的に説明することを可能にしている。さらにこのことは、本理論の最大の特徴である、心理検査法の解釈とその統合に大きく貢献している。

従来、心理検査法は質問紙法、作業検査法、投映法に大きく分類され、それぞれが意識から無意識の異なったレベルを捉えていると漠然と理解されるだけであった(たとえば、「質問紙法は自己評価法であるために意識水準の人格像を反映しやすく、投影法は非構造的な検査のために無意識水準の人格像が投影されやすい」といった具合に)。こうした検査法の位置づけは、投映法についての誤った理解を促すばかりでなく、最悪の場合解釈を歪めてしまう結果となりかねない。まして各検査から得られた情報間の関係を論理的に説明したり、ある検査から得られた情報が被検者の全人格においてどのような意味を持つかについて解釈したりすることなど、とうてい考慮されていない。

しかしながら、構造分析理論は様々な心理検査法が人格のどのレベルを捉えているかについて説明し、さらに各検査から得られた情報が被検者の全人格のどの構成物を反映しているのかについて理論化しているのである (Wagner, 1971; Wagner, 1976; Green, 1978; 山上, 1993)。とりわけ、投映法バッテリーの解釈に関しては、本理論を提唱した Wagner 自らが開発した「ハンドテスト」

(Wagner, 1962 ; Wagner, 1983) という投映法検査を用いることで、被検者の人格力動や精神病理を重層的な視点から描き出すことを可能にしている。つまり、構造分析に基づいて心理検査法を統合することで、従来の質問紙法と投映法といった単純な意識レベルの違いといった視点からのテストバッテリー構成ではなく、被検者の人格構造のどこに焦点を当てるのかといった視点からテストバッテリーを構成し、それらを解釈することが可能になるのである。

そこで本論文では、構造分析に基づいた心理検査法（とりわけ投映法）の統合において重要な検査用具の一つとなるハンドテストを取り上げ、構造分析が投映法解釈にどのように適用されるかについて解説したい。解説にあたっては、まず構造分析の基本仮説を紹介する必要がある。そこで、Wagner (1971) の「Structural Analysis: A Theory of Personality Based on Projective Techniques」から構造分析の基本仮説の概要をまとめた。これを踏まえた上で、構造分析に基づいてハンドテストをどのように解釈することが可能であるか、一事例のハンドテスト解釈を詳しく行った。特にハンドテストを取り上げたのは、この検査が構造分析に基づいたオリジナルな人格理解の視点を提供するためであり、ハンドテスト解釈の提示は、構造分析を紹介する最も良い例であると考えられるからである。

II. 「構造分析」の基本仮説

(1) ファサード・セルフ (FS) : 外面自己

構造分析では、人格を外面自己 (FS) と内面自己 (IS) の二大構造から理解するため、FS と IS に関する仮説は、本理論の基本原理ともいえるであろう。ここではまず、個体を形作る基本的枠組みであり、人格の外壁とも考えられる FS について解説する。

Wagner によると FS は、「態度や行動傾向についての階層的に組織化されたまとまり (organized set)」であるとされている。これは、検証可能性を前提とした心理学のターゲットであるいわゆる“行動”にあたる部分であり、観察可能な表に現れた (外顕的な) その人の特徴であるといえよう。また、その人が他者や環境に対してどのように接し、どのように振る舞うかといった“外界への態度”でもある。さらに、投映法によって捉えられる FS の側面を考えるならば、その人が日常生活をどのように生き、自分の周りの世界や環境をどのように感

じ取っているかという“原型的な体験様式”であるともいえるのではなからうか。こうした外界に対する基本的な“構え”であるFSは、「人生早期に獲得され、自動化され、基礎的な現実的接触を構成するもの」であるとされている。

さらにWagnerは、「FSは特別な環境上の出来事に呼応することで発達し、そして、良しきにつけ悪しきにつけ現実と結合している。言うならば、『今ここで』である」としている。つまり、FSは我々が“生きている”体験のための基礎であり、我々にとって必要最低限の“自分のまとまり”を構成するものである。そのため、「もしFSが存在しないならば、『現実』は存在しない」とまでされている。このようにFSは非常に原初的なものであるため、それは「単なる反射であり」、「根本的には学習された知覚と反応の一連の処理」でもある。しかし決してFSは単純なものではなく、非常に複雑で多種多様な環境に対して敏感に反応することができるものなのである。従って、このFSの学習と発達が阻害された場合、その個体は非常に困難な状況に立たされることになる。「世界は人間にとって理解し難いものとなり、混乱し恐怖に満ち、秩序の崩壊した条件が続き、分裂病と呼ばれる状態となる」という。つまりFSは、現実をどのように意味づけ、世界に対してどのように反応するかという体験の基礎を担っているのである。

このように構造分析では、人格におけるFSの機能やその役割を非常に重視している。その一端は、精神分析理論において自我の中心的機能とされる防衛機制についての構造分析による説明からも明らかである。構造分析では、防衛機制は個体が現実との接触を保つために如何にFSを保持しようとするかという視点から説明している。いくつか例を挙げると、「抑圧：FSの機能を妨害するような衝動や動機づけを制限すること、解離：意識水準が低下し、FSが機能していない間、抑圧された衝動を解放すること、否認：FSによってうまく操作できない現実の一面があることを認めることを拒否すること」とされている。

しかし、最終的にはFSのみでは個人は全体として機能することはできない。「人は自分自身を機能しているものとして認識し、同一性の感覚を獲得し、主観的な理想像や目標、自己評価を形成する」ものと考えられ、外的世界に方向付けられているFSのみでは、我々が当然体験している基本的な欲求や意志を発現することはできない。つまり、二大構造のもう一方であるIS(内面自己)の存在なしでは、個人を形作ることはできないのである。「FSとISは複雑で独特な人格を形成するために相互に作用し合う」ことで初めて個性的な人格となるのである。

(2) イントロスペクティブ・セルフ (IS) : 内面自己

FSが人格の基本的枠組みと考えられるのに対して、二大構造のもう一方であるISは人格の奥行きを構成するものと考えられる。Wagnerは、「それ(IS)は最初、FSの操作に対する気づきから発展した同一性の感覚に由来し、次に道徳的な判断や個人的な願望、生活スタイルや常識、世界に対する一般的で哲学的な見解などへと発展していく」としており、FSが発達した後に形成される「全人格の複雑さや深さ、特異性を生み出す」ものと定義されている。つまりISは「内的で主観的な現象」であり、主に言葉に依存した、「個人の自己の行動に関する認知」であり、「自己概念の形成や、さらに空想や理想、人生スタイルを生み出すものとなる」ものである。

従って、ISは自己の同一性の認識そのものであるため、人格を統治する主体として機能することが期待される。つまり、「ISはFSを通して間接的に表現されるものではなく、行動の底にいつも存在してなければならないもの」であり、我々が生きて活動し、体験する際、いつも機能しているものである。FSが“生きている”体験の基礎であることを考えるならば、その体験を認識し、統合するのがISである。ISとFSの両者が機能して初めて、我々は“生きている”体験を経験することが可能なのである。よって、ISとFSは絶えず相互に作用しあい、両者が機能的に活動することで適応的な人格となり得ると考えられる。

仮にISが十分に発達しなかった場合は、人格障害の精神病理が生じるとされている。「彼ら(人格障害)は実際的で適応的であり、ある場合には外的な現実に関する客観的な側面に対して極端に同調的であるが、彼らの良心や忍耐力、動機付け—これらはISから生じる—は貧弱なものである」という。反対に脆弱なFSを補う形でISが肥大した場合は、「こうした現象はパラノイドやある種の分裂病において見られ、彼らは空想や幻覚、特異な思考に浸っている。その拠り所となっている現実、外的世界の一貫した妥当性や具体的な現実によってほとんど検閲されない希薄で内的なものである」ことになる。そして、「FSとISが合理的によく発達しているが、しかし葛藤が顕著な場合は、神経症の土台が敷かれることになる」という。

このように人格をISとFSの二大構造に分けて理解する(Figure 1「FSとISの構造図」参照)ことで、人格発達の様態や様々な精神病理を、FSとISの発達障害から理解したり、これらの相互作用の機能障害から説明したりするこ

とが可能となるのである。このことは、構造分析が、「FS と IS 構造の相互作用を分析することによって提示されるいわゆる“人格”とされているものを、有意味によりうまく説明して」いることを示している。

しかしながら、Wagner は構造分析の限界についても明確に言及し、「構造分析は人間の行動や重要なパラメーターである動機づけや習性、知能や学習能力などを完全に説明するには不十分である」として、FS と IS のみが人格を構成しているのではないことを強調している。こうした限界を十分に踏まえた上で本理論を活用することで、さらに人格理解を深めることが可能となるのではなかろうか。

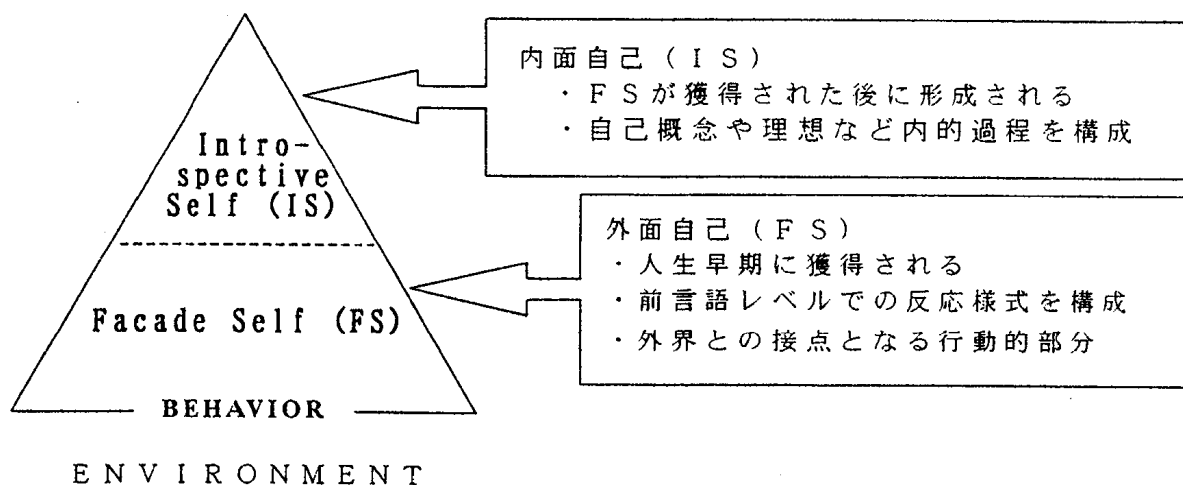


Figure 1 FS と IS の構造図 (Wagner, 1976 より)

(3) 構造分析とハンドテスト

ハンドテストは、手の絵を刺激とした投映法検査で、9枚の様々なポーズをした手の絵と、1枚の白紙カードの計10枚からなっている。被検者は1枚ずつ提示されたカードに対して「その手が何をしているように見えるか」を答えるように求められる。本検査は、「手は発達的にも機能的にも外的世界と影響しあい、かかわり合うのに決定的な部位であるため、手の絵には典型的な行動傾向が投影される」(Wagner, 1983)との仮説から、被検者の行動傾向に焦点を当てて作成された投映法である。

手は人間が外界へ働きかける上で最も重要な機能を果たす身体器官であり、人間の内的世界と外的世界とを橋渡しする機能を持つものと考えられる。Wagner はさらに大脳と手の相互フィードバックからも手と実際の行動との関

連性を指摘しており、吉川（1994）は「刊行者が手は外界との関わりの接点であると述べる時、（略）もっぱら外界に向けて働きかけようとする能動性が強調されているように思われる」ともしている。このように物を触ったり、働きかけたりという外界への基本的働きかけの前提となるものが手であり、「我々が日常生活において、手を通して世界とつながっているという『手』の心的作用」（佐々木，1999）を考えると、本検査の反応が「自分の周囲の世界に対する基本的態度」を反映していると考えerことは十分可能であろう。これはまさに構造分析でいうFSであり、ハンドテストは最初からこのFSを捉えうる検査として開発されたのである。

従って、ハンドテストは被検者の外的世界との交流の仕方である行動傾向を測定する検査である。しかしながら、単にFSのみしか捉えられないということではなく、FSには当然その背景にISが存在している。従って、「反応数の乏しいハンドテスト記録は、FSもISも共に脆弱なことを示している」（Wagner, 1971）といった解釈が可能となる。このように、ハンドテストは解釈において構造分析が非常に重要な役割を果たしている。以下にハンドテスト解釈の一事例を取り上げることで、構造分析が投映法検査にどのように役立てられているかを提示したい。

III. ハンドテスト解釈事例

(1) 事例概要*

A子(18歳)は、過食嘔吐の治療のために3度目の入院となった高校生である。彼女の母親は飲酒、拒食・過食、異性問題など多彩な問題で精神科入退院を繰り返した人であった。幼少期からA子はそうした母親に何かというと暴力をふるわれ、また母親自身が「淋しい」からとの理由で、幼稚園や学校にも行かせてもらえず、食事の世話から弟妹の面倒まで、家のことはほとんど彼女がやりくりしなければいけない暮らしを続けてきた。しかし、彼女が15歳の時、その母親はA子の目の前で内縁の夫との喧嘩の末に亡くなってしまった。母親の死後、財産家の祖母に引き取られ、「生まれて初めて生活の心配をしなくても良い暮らしができるようになった」が、そんな中でA子は次第に祖母との二人暮らしに息が詰まるようになり、拒食・過食を繰り返すようになった。祖母に

* 本事例は、日本ロールシャッフ学会第3回大会（佐々木，1999）で発表された。

は「入院したのになぜ病気が治らないのか」と言われ、期待を裏切ってしまったと感じており、本格的な治療を希望しての3度目の入院であった。

(2) ハンドテスト解釈

ハンドテストの Protokol および集約スコアを Table 1「A子のハンドテスト・Protokol と集約スコア」に示した。

1) 形式分析

①集約スコア*の解釈

総反応数 19 と日本の一般成人平均 (18.41 個) (山上他, 2000) と同程度出しており、外界に対する基本的な反応性、活動エネルギーは十分である。しかしながら、ER (体験比率) をみると、一般的には INT [対人] カテゴリーと ENV [環境] カテゴリーがほぼ等しく出現する (日本平均 $\Sigma INT : \Sigma ENV = 9 : 7$) のに對して、 $\Sigma INT : \Sigma ENV : \Sigma MAL : \Sigma WITH = 13 : 5 : 1 : 1$ と、INT [対人] カテゴリーに偏ったものとなっている。現実世界に対する働きかけである ENV [環境] カテゴリーが少ないことは、INT [対人] カテゴリーの反応が現実生活には基づかないファンタジーの世界のものであることが指摘され、A子の対人関係が日常生活において決して豊かなものとはなっていないことが推測される。これは、A子の人格構造として、IS 機能が FS 機能を過剰に上回っていることを意味していると考えられる。

また、攻撃的な行動化の予測指標として用いられる AOR (行動化比率) は 6 : 6 と非常に高く (日本の一般成人平均では差を用いた行動化スコアが 2.4)、INT [対人] カテゴリーの反応がファンタジーにとどまっているとはいえ、外界に対する攻撃的な反応様式が非常に活発なものとなっていることは確かであろう (Clemence, Hilsenroth, Sivec; & Rasch, 1999)。MAL [不適応] カテゴリーの反応が心的な葛藤を反映することから、行動化への抑制的役割を果たすことがあるが、A子の場合はそうした葛藤を示唆する反応である TEN ((緊張)) = 0 や CRIP ((不自由)) = 0 も出ておらず、むしろ直接的な強い不安を表

* ハンドテストでは、すべての反応は 15 個の量的スコアリングのどれかに分類される。それらは各カテゴリーごとに集計されたあと、様々な比率や集約スコアが算出され解釈に用いられる。集約スコアは、① ER (体験比率) : 基本的な心理的エネルギーの配分傾向、② AOR (行動化比率) : 反社会的な行動が発現される可能性、③ PATH (病理スコア) : 病理性の指標、④ AIRT (平均初発反応時間)、⑤ H-L (初発反応時間差) の 5 つからなる。

Table 1 A子のハンドテスト・プロトコルと集約スコア

	量的スコア	質的スコア
I		
△ 6" ちょうど外人が挨拶する感じ。(Q) ハイって感じ。(Q) 友人に軽く。	COM	
< 握手 (Q) 自分と同じか目上の人。	AFF	
▽ 後、おいでって感じ。(Q) 犬とかペット。餌を与える感じで。	DIR(AFF)	IM
II		
△ 2" 印象、ぱっと見た感じで、助けてってどうか、助けを求める手で、	DEP	
後、砂をつかむ瞬間。(Q) ぱっと。	ACT	
< 握りつぶす。(Q) わかんない。怒りで、怒りみたい。	AGG	
III		
△ 4" 恐る恐る何かを指してる。(Q) 何あれ？(Q) 怖がった感じ。	FEAR	
IV		
△ 4" 小さい子供を撫でようとしてる手。	AFF	IM
< 後、襲うとした時に押さえつけようとしてる瞬間の手。	AGG	GRO
▽ 何かを手のひらにのっけて、見せようとしてる手。	EXH(DEP)	
V		
△ 3" 絵がわからない。どういう手の形ってどうか。		
(自由に見て良いよ) どうしようとしてるのか、わからない。	FAIL	
VI		
△ 6" 何かを手を隠し持つてる。(Q) 驚かす。びっくりさせてやろうとしてる。	AGG	HID
△ 花束とかをさしあげようとしてる状態。	AFF	
△ ジャイケン	COM	IM
VII		
△ 10" そのまま自分の手の様子を見せている (Q) わかんない。自分で自分の		
手を見てみたい。(Q) 自分の状態、きれいだとかじゃなくて、		
ベットで手をあげて、自分はどうなるんだろうって感じで見てる。	PAS	
VIII		
△ 3" これは、花の種をまこうとしてる。	ACT	
針に糸を通そうとしてる。	ACT	
< 子犬、子猫をなつかせようとしてる。そっと、おいでって、感じ。	DIR(AFF)	IM RPT
IX		
> 4" 襲おうとしてる時。首を絞めようとしてる。ちょうど母親の手みたい。	AGG(FEAR)	GRO EMO
この手が誰かを襲う感じ。それ以外見えない。		(PERS)
X		
20" こんな状態。(D軽く握る) 意味的には、自分が探していたものが	ACT	
見つかったって・・・まだ、自信がないせいか、せいで、捕まえたものが		
すり抜けていく・・・掴みかけたものがなくなっちゃったっていうのを		
想像した。今の心理がそんな状態。		

AFF=3(2) ACQ=0 TEN=0 DES=0 R=19		
DEP=1(1) ACT=4 CRIP=0 BIZ=0 AIRT=6.6"		
COM=2 PAS=1 FEAR=1(1) FAIL=1 H-L=18"		
EXH=1 PATH=3		
DIR=2 ΣINT:ΣENV:ΣMAL:ΣWITH=13:5:1:1 AOR=6:6		
AGG=4		

EMO=1 GRO=2 HID=1 IM=4 RPT=1 (PERS)=1		

す FEAR((恐怖))反応=1 が出ているなど、攻撃的な行動化の危険性を強く秘めたものとなっている。

一方 PATH (病理スコア) は 3 と日本の一般成人の 84% 臨界値である 4 を越えていない(日本平均は 2.12)。これは先に述べたように MAL[不適応]カテゴリーが比較的少なかったためであるが、実際には出現頻度としては稀である FEAR((恐怖))反応や、FAIL((失敗))反応が出ているため、これらの反応がどのような意味を持っているかを精査する必要がある。

カード刺激に対する防衛の様子を反応生成時間からみると、AIRT(平均初発反応時間) は 6.6 秒と日本の一般成人平均の 7.3 秒とそれほど変わらず、H-L (初発反応時間差) も 18 秒と日本の平均 18.4 秒とほぼ同じである。VIIカードと Xカードに若干の遅れが見られるため、継列分析によってその内容を吟味する必要があるが、全体として著しい防衛の破綻や反応の抑制はない。

②量的スコアの解釈

INT[対人]カテゴリーが 13 個と日本の一般成人の平均 9.31 個と比べて若干多めである。特に多かったのは AGG((攻撃))反応で、典型範囲が 0 - 4 個とそのぎりぎりの値である。A子に特徴的なのは、これだけの AGG((攻撃))反応を出しながら、AFF((親愛))や DEP((依存))反応を平均以上出していることである(AFF((親愛))の平均が 2.19 個、DEP((依存))の平均が 0.67 個)。そのために全体として INT[対人]カテゴリーが多くなったと考えられる。その反面 INT[対人]カテゴリーで最も多くなるとされる COM((伝達))反応が 2 個にとどまっている(日本の平均 2.70 個)。これは他者との基礎的な信頼関係を前提とした対人交流が欠けたまま、A子が偏った対人関係を築いているということを推測させる。

このように偏った INT[対人]カテゴリーにエネルギーが集中しているため、当然のことながら ENV[環境]カテゴリーは若干少なく、日本の平均で 6.29 個出ている ACT((活動))反応が 4 個である。日常生活活動への基本的な関心は失われていないものの、生きていくための課題、遂行、活動に対して積極的に関わろうとしていないことが考えられる。

内的な弱さや外的な抑制によって行動傾向がうまく発現できない困難さを表しているとされる MAL[不適応]カテゴリーは 1 個と少ない(日本の平均で 1.51 個)。しかし、サブカテゴリーの TEN((緊張))や CRIP((不自由))反応よりも病的には重い意味を持つとされる FEAR((恐怖))反応が出ている。TEN((緊張))や CRIP((不自由))反応は、緊張や無能感や心配に悩まされているこ

とを反映するものであり、ある意味で心的な葛藤や防衛の表れでもあると考えられる。A子はこうした苦悩や葛藤的な反応は出さずに、FEAR((恐怖))反応のみを出しているのである。FEAR((恐怖))反応は、「心理的、身体的な傷つきに関わっている。他者や状況に関わる恐怖症的な体験、すなわち被検者自身の内在化された敵意がFEAR((恐怖))反応を生み出す。この反応は、自我の統合性を脅かす脅威に対する切実な心配を反映している」とされており、典型範囲が0-1個と1つでも出ていると非常に重要な指標となる反応である。しかも、これを最も構造化された刺激であるIIIカードに出していることは、A子の自我を脅かす脅威が非常に日常的なものであることを推測させる。

さらに問題となるのは、一般成人ではめったにないFAIL((失敗))がカードVに生じていることである。これは、「ある生活役割を行動化することに関わる両価性や乖離的な傾向、現実接触の崩壊」を表すとされており、A子の現実接触が非常に不安定なものであることを示唆している。この反応失敗がA子のどのような体験様式を反映しているかについては、継列分析で精査する必要があるが、これらFEAR((恐怖))反応やFAIL((失敗))は、A子のFS機能が非常に弱体化していることを意味しており、このことが内的葛藤の行動化の可能性を高めていると考えられる。

③質的スコアの解釈

4個のAGG((攻撃))反応のうちの2個がGRO《粗野》(日本の平均0個)を伴い、そのうちの1つはEMO《情動》(日本の平均0.08個)とPERS—私事化—を伴う非常に個人的で感情的な反応である。A子の攻撃的な反応が、直接自己の体験と結びついた生々しいものであることを推測させる。こうした生々しい反応が直接露呈していることは、A子がこうした体験や攻撃的な感情を緩和したり中和したりする経験を持ってこなかったためではなかろうか。

そうした人格発達の未熟さも反映していると考えられるのが4個のIM《未熟》(日本の平均1.84)である。“犬とかペット”“小さい子ども”“子犬、子猫”とかかわいらしいものが出ており、お人形のようなA子に重なるものを感じさせる。これに隠されたように前述の生々しい攻撃性が表出され、まさしく1個出ているHID《隠蔽》(日本の平均0.09)の「びっくりさせてやろうとしている」通りである。A子が内に秘めたものの激しさにA子自身が困惑しているのかもしれない。

2) 継列分析

【Iカード】

新奇場面にもかかわらず、無難に6秒で「外人が挨拶する感じ」、続いて「握手」と標準的な反応を出している。A子の初対面での人当たりの良さを彷彿とさせ、ある意味でA子の環境への順応力をうかがわせる。しかしながら、第3反応では「おいでって。犬とかペット。餌を与える感じ」と近寄ってきてもらうことを意図した特殊なDIR((指示))反応となっている。このカードでのDIR反応の多くは「止まれっていつている」というもので、初対面でのためらいや緊張を推測させる反応であることを考えると、A子の反応にはそうした戸惑いや迷いが見られない。その上、友人→同じか目上→餌を与える(主従関係)というように次第に対象(相手)との関係が一方的なものとなっていくなど、A子の対人関係の深まり方に限界を感じさせる。

【IIカード】

2秒と非常に短時間で「助けて」と率直な依存欲求を出している。このカードは神経症的なショックを引き起こすとされているが、A子の場合にはショックを抑制したり、統制したりする試みがなされないまま、反応として表出してしまったようである。その後、一応は抑制的な働きが生じたのか「砂をつかむ瞬間」と情緒的内容から離れたものの、このカードの刺激を十分には統制できなかったらしく、依存的な反応とは正反対の「握りつぶす。怒りで」と攻撃的な反応となっている。同じカードに依存と攻撃という相反する反応を見るというA子に特徴的な反応パターンがすでに現れている。

【IIIカード】

かなり構造化された無害でやさしい刺激とされているこのカードで、「恐る恐る何かを指してる」と明らかなFEAR((恐怖))反応を出し、出しやすいCOM((伝達))やACT((活動))反応を出せていない。このカードに標準的な反応が出せないことは重篤な問題を示唆するとされており、A子の外界に対する非常に強い警戒心、恐怖心が推測される。IIカードからの継列を考えるならば、依存→攻撃の後の恐怖反応と考えられ、非常に象徴的な意味を持っていると考えられる。

【IVカード】

IIIカードの恐怖から立ち直って「小さい子どもを撫でようとしている手」とAFF((親愛))反応を出せている。しかし、その後に「襲おうとした時に押さえつけようとしている瞬間の手」と相反する反応を続けて出している。「瞬間の手」

という言い回しは非常にリアルで、A子の虐待体験を象徴するかのようである。A子の反応の多くが現在進行形のまま終わっているため、一般的な手としての抽象化がなされておらず、その分非常に生々しいものとなっている。こうしたことから外的刺激に対する防衛機能を果たすとされるFSの未熟さが推測される。

【Vカード】

受動性への態度や神経症的なショックを反映するとされているカードである。A子にとっては、このカードのinjureな刺激が強烈だったのではなかろうか。「絵がわからない」と認知的な機能そのものも破綻し、統制不能となっている。このカードの被害的なテーマは、母親の死とそれに同一視している自らの虐待体験とを刺激したことが推測される。A子のモーニング・ワークが全く手つかずのままであること、また、傷つけられた自己像の問題が根深いものであることを感じさせる。

【VIカード】

攻撃的な反応を出しやすいカードであるが、直接的な攻撃ではなく、「隠し持って」「驚かす、びっくりさせてやろうとしている」反応となっている。A子の非常に生々しい攻撃性がまさしく隠されているかのようである。しかし、それを詫げるかのように「花束とかをさしあげようとしている」と反転している。II・IV・VIカードとどれも1つのカードにAFF((親愛))とAGG((攻撃))反応を出すという両価的な反応様式が繰り返されており、A子にとって対象の意味が非常に不安定なものであることを推測させる。

【VIIカード】

10秒と他のカードに比べて幾分反応が遅れている。「自分の手の様子を見ている」「自分はどうなるんだろうって感じで見てる」と、カードの手が自分の手と重なってしまうという特殊な反応を出している。青年期には若干見られる反応で、自己愛的なテーマを感じさせる反応ではあるが、A子の場合、このカードの無難な刺激が自己の存在に対する漠とした不安を喚起させたように感じられる。IVカードの攻撃的な刺激の後、Vカードの被害的な刺激、そして、VIカードの攻撃的な刺激の後のこのカードの動きのない刺激は、Vカードほどではないにしても、同じような傷つき無力な自己の存在を刺激されたのではなかろうか。

【VIIIカード】

IIIカードに続く反応の容易なカードとされている。カードの刺激系列も変化

するせいか(佐々木,1999),再び立ち直ってカードプルのACT((活動))反応を2つ出している。カード刺激の変化によってこれだけ回復できるということはA子の力ではあるが,ある意味で環境に影響を受けやすいことでもあると考えられる。Iカードと同様に適応的な反応を出した後に,「子猫をなつかせようとしてる」と特殊なDIR((指示))反応を出している。愛他的な内容に一方的な関係が隠されており,こうした反応が標準的な反応の後に抵抗なく出ていることから,こうした関係がA子にとっては非常に日常的なものであったことが推測される。

【IXカード】

最も反応の難しいカードとされているが,4秒と短時間で「襲おうとしてる時。首を絞めようとしてる。ちょうど母親の手みたい」と被害体験がそのまま加工されずに生々しい攻撃反応となっている。母親の手と言及してしまうなど,虐待体験を連想させるものの,自分が襲われるFEAR((恐怖))反応とはならず,「誰かを襲う感じ」と他人にすることで何とか防衛されたようである。

【Xカード】

20秒と最も反応の遅れたカードである。白紙カードであることから,将来の生活役割を思い描く能力と関係するとされているが,A子の反応は「探してたものが見つかった」が,「自信がないせいで,捕まえたものがすり抜けていく」という,将来への諦めや虚無感,無力感を感じさせる反応である。前半の「探してたものがみつかった」で終われないところがA子であり,自分が何かを得ること・達成すること・幸せになることを自らが否定しているかのようである。これまで確かなものが安定してとどまる体験(安心感や信頼感)を経験してきていないことを考えると,A子がそれを求めながらも,決して自分には得られないものとして体験様式が固定化されてしまっていることが推測される。

(3) 構造分析によるハンドテスト理解

FSを捉えるとされるハンドテストではあるが,A子のハンドテスト・プロトコルには,その量や質的な豊かさから彼女の豊かな内的世界(IS)が十分に表現されている。これは,彼女が非常に悲惨な生い立ちであったことを考えると,そうした生活の中でA子が様々なファンタジー(これはISの機能である)を発達させ,それによって必死で生き残ってきたことを想像させるものである。このことは,ISを捉えると考えられる他の投映法検査(ロールシャッハ法等)に

よって確認すべきことであろう。

しかしながら、プロトコルにはっきりと現れているのは、A子の危うい人格構造 (FS 機能の未発達) であり、A子が自らを守る自我機能を十分に発達させることができないまま、驚異的な外的世界におびえて生きていることが全体を通して理解される。まず、ほとんど自我防衛が働いていないかのような恐怖反応からは、彼女が驚異的な外界を中和することをほとんど経験してこなかったことを窺わせる。A子がどれだけISで補ったとしても、A子の現実には驚異的なままで、A子は支えのない不安定な自己しか経験できなかったのであろう。このことは、岡野 (1995) が「外傷体験は自我形成の途上にある小児や思春期において最も大きな痕跡を残す」と指摘するように、A子が小児期・思春期において慢性的な虐待、それに続く母親の死と、非常に深刻な外傷体験を経験してきたことを考えると十分に了解されることである。

こうした状況の中でA子は観念的な (現実ではない) IS に依存することになったと考えられる。これは、上芝 (1995) が外傷体験を根にもつと考えられる多重人格のロールシャッハ特徴として、「多重人格者が心の内に、よく言えば豊かなものを、悪くいえば厄介な問題をたくさん抱えていると言うことができよう。極言すれば、はち切れんばかりに内が詰まり、あるいは外へ現れ出んと待ち構えているといった様子がかがわれるのである」と指摘していることと一致する現象と思われる。しかし、A子のFSは“はち切れんばかりの”ISを支えるだけのエネルギーは持ち合わせていない。A子のFSは最後のXカードに象徴されるように、自らの人生、世界に対して、打ちひしがれた無力な反応様式しか形成することができないのである。このことは、お人形さんのようなA子が醸し出している現実感のなさとも一致するものと思われる。A子がこれから本当に生き残っていくためには、空想世界ではなく現実世界の中で彼女が本当の安心感を体験できるような基本的な対人環境から整えていく必要があるのであろう。

IV. まとめ

本論文では、構造分析の基本仮説である外面自己 (FS) と内面自己 (IS) について概要を紹介し、さらに外面自己を捉える検査として開発された新しい投射法検査「ハンドテスト」について、その解釈事例を紹介した。

構造分析によるハンドテスト理解から明らかのように、構造分析に基づいた

解釈は、ハンドテストが被検者の人格構造の何を捉えているかを明確にするため、ハンドテスト反応を一貫した視点に基づいて解釈することが可能であったと考えられる。紹介した事例は、ハンドテスト反応にも豊かなISを推測させる情報が数多く含まれており、こうしたISに支えられて表面的な適応を保っている事例であると考えられた。しかしながら、これらが観念的なものであり、現実に根ざしたものではないことは、ハンドテスト反応から明らかである。つまり、ハンドテスト反応を構造分析から理解することで、彼女の人格構造の危うさを明確に解釈することができたのである。

このように、ハンドテスト反応からIS領域を推測しうる部分もあるが、ハンドテストに反映されるFSの特徴をきちんと踏まえた上でこれらを理解することで、被検者の外的世界との関わり方を一貫した視点から解釈することが可能となる。これは、被検者の現実世界における存在のあり方を理解する視点であり、症状や問題がどのような意味を持っているかについて理解する一助となると考えられる。

しかしながら、事例についての全体的な理解は他の心理検査法との統合解釈が不可欠である。構造分析は、従来の心理検査が被検者のどの人格レベルを捉えているかについての理論的枠組みをも提供しているため、ハンドテスト解釈を矛盾なく他の検査と統合することを可能にする。従って、心理検査結果を統合し、被検者の全人格構造を描き出すことで初めて、構造分析の真の有効性が確かめられると考えられる。これについては、別稿で紹介したい。

〈謝辞〉本論文の事例解釈にあたり、明石土山病院の山上栄子先生と山梨大学教育人間科学部助教授吉川眞理先生のお二人に多くのご助言を賜りました。深く感謝いたします。

V. 文 献

- Clemence, A. J., Hilsenroth ; M. J., & Rasch, M. A. 1999 Hand Test AGG and AOS variables : Relation with teacher rating of aggressiveness. *Journal of personality Assessment*, 73, 334-344.
- Greene, R. S. 1978 Study of Structural Analysis: Comparing differential diagnoses based on psychiatric evaluation, the MMPI, and Structural Analysis of the Hand Test and Rorschach. *Perceptual and Motor Skills*, 46, 503-511.

- 岡野憲一郎 1995 外傷性精神障害のスペクトラム 精神科治療学, 10, 9-19.
- 佐々木裕子 1999 日本におけるハンドテストのカード特性について 福岡教育大学紀要第4分冊, 48, 215-228.
- 佐々木裕子 1999 摂食障害者の母親に対する依存と敵意—投影法バッテリー「ハンドテスト」と「ロールシャッハ法」による検討— 日本ロールシャッハ学会第3回大会(専修大学) 抄録集 32-33.
- 上芝功博 1995 ロールシャッハ法からみた多重人格 精神療法, 21, 533-540.
- Wagner, E. E. 1962 *The Hand Test: Manual for administration, scoring and interpretation*, Los Angeles: Western psychological Services.
- Wagner, E. E. 1971 *Structural Analysis: A theory of personality based on projective techniques. Journal of personality Assessment*, 35, 422-435.
- Wagner, E. E. 1976 *Personality dimensions measured by projective techniques: a formulation based on structural analysis. Perceptual and Motor Skills*, 43, 247-253.
- Wagner, E. E. 1983 *The Hand Test Manual Revised 1983*. Los Angeles, California: Western Psychological Services.
- 山上栄子 1993 分裂病者における投影法についての一考察—風景構成法, ロールシャッハ, ハンドテストの有効性と限界— 日本芸術療法学会誌, 24, 30-39.
- 山上栄子・吉川真理・佐々木裕子訳 2000 ハンドテスト・マニュアル. 誠信書房.
- 吉川真理 1994 投影法ハンドテスト研究序論 山梨大学教育学部研究報告, 45, 184-191.